



明治二十二年（一八八九）

絹本着色

本紙二一六・六×一四五・三

美しい飾り羽を優雅に垂らした雄のクジャクを画面の中心に置き、背後から雌のクジャクが顔をのぞかせる。その周囲を牡丹が埋め尽くし、頭上では白木蓮が花を咲かせ、その後ろには海棠が配されている。この花の取り合わせは、白木蓮の漢名「玉蘭の「玉」、海棠の棠と音を通じる「堂」、牡丹の別称富貴花の「富貴」から「玉堂富貴」（その家に富が満ちるの意）として好まれた吉祥画題である。この華やかな画面にサンジャクやブンチョウといった禽鳥がさらなる賑やかさを加え、あたかも色彩に満ちた楽園のような世界が表現されている。また、クジャクも古来より吉祥画の題材とされてきたが、江戸時代中期に円山応挙がその卓越した描写技術を示すようにクジャクを繰り返し描いたことから、京都の円山四条派を中心に写実的な孔雀図が流行した。その中で牡丹が周囲に咲いた太湖石の上にクジャクが立つ「牡丹孔雀図」が一つの定型となったが、本図の奇岩に立つクジャクと牡丹の取り合わせも明らかにそうした伝統を踏まえて描かれたものである。熊本出身の画家杉谷雪樵（一八二七〜九五）は御下命によって本図を製作し明治二十二年九月に上納した。



## クジャク

華麗な姿で人を魅了するクジャクは、『日本書紀』には六世紀末、新羅が朝廷に献上したことが記されており、以降、中国や朝鮮半島を経由して日本にもたらされたことが知られている。ただし、この舶来の珍しい鳥を見ることが出来たのは天皇や將軍など時の権力者だけに限られた。江戸時代には長崎の交易を通じて海外から様々なものが流入する中、鳥も例外ではなく、クジャクを始めオウムやインコ、ブンチョウ、カナリアなどを、当時の実力者たちは競って求めた。寛永二十年（一六四三）の俳諧論書『あぶらかす』の記述は、當時すでに孔雀遣いという者がおり、クジャクに芸をさせていた見世物があったことを示しているという。また、博物学への関心が高まるとともに、多くの鳥類図譜が作られた。舶来の鳥の飼育法も海外から伝えられて国内でも改良が進み、飼鳥ブームをまきおこした。そして庶民も見世物としてクジャクを見ることが出来るようになる。十八世紀の寛政の頃には江戸や京都、大阪には茶店の客寄せとしてクジャクや珍鳥を見せる「孔雀茶屋」が次々と開店し、大変な人気を博した。

クジャクは、孔雀明王像のように仏画において古くから描かれてきたが、江戸時代中期以降は、花鳥画の主要な画題として描かれるようになる。この花鳥画の中で、クジャクが活き活きとした輝きを放っているのは、生きたクジャクを普段に見ることが出来る時代となったことも背景にある。ところで、古くから日本の美術のなかに見られるクジャクは、そのほとんどが、東南アジアを原産とするマクジャクで、その部分が緑色で頭部の冠羽が筆のように直立している。作品番号52、53の外国作品は、インドやスリランカを原産とするインドクジャクで、首が青く頭部の冠羽が扇形となっている。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

鳥の楽園 — 多彩、多様な美の表現

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 68

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年三月二十一日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonaru Shozokan